

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題を普段着のまま紹介するシリーズ

すなっぴ

正解のない介護の問いを とことん考え抜く

伊勢崎興陽高校「福祉と人間を学ぶ系列」 中山見知子先生の「介護過程」授業

かつての農業高校は人間性と社会性の育成を追求する総合高校に

2019 年の夏休みをはさんで私たちは伊勢崎興陽高校(島ノ江繁校長:生徒募集数各学年 200)の授業取材しました。1948 年に新制高等学校として佐波農業高校がスタートした当時は、農業科と農村家庭科が設置されていましたが、その後の学科改編で、園芸科、食品化学科、生活科などが加わり、1993 年(平成 5 年)には校名を伊勢崎興陽高校に変更しました。さらに 2005 年(平成 17 年)には総合高校として大きな変貌をとげました。学科のくくりがなく、一年生の前半は全員が共通の科目を学び、後半に入ってから「いのちと緑を育む系列」「食を科学する系列」「食と経済を考える系列」「花と緑で環境を創る系列」「福祉と人間を学ぶ系列」「生活と文化を築く系列」の 6 系列の中から自分の

適性と進路を考えて科目を選んで勉強します。校長先生は、「中学生が高校を志願する時のミスマッチを減らすためには有効な仕組みです」、「2 年前の卒業生は 200 人。ひとりも欠けていませんでした」と総合学科の意義を語ってくれました。

福祉と人間を学ぶ系列

総合学科制発足の翌年 2006 年に「福祉と人間を学ぶ系列」で福祉の専門教育が始まりましたが、その時に赴任してきたのが中山見知子先生です。中山先生は桐生高校で家庭科を担当してきましたが、1 年間、群馬医療大学の科目履修生として専門教科「福祉」を学び高校教員免許を取得しての着任でした。学校にとっても中山先生にとっても挑戦の日々が始まりました。

以来 14 年間、教師と生徒が一体となって歩んできた結果、多くの卒業生が豊かな知識や技術を身につけて福祉や介護の世界に巣立っていきました。まずは中山先生の「介護過程」の授業の様子を報告します。



温室に咲いていたシクラメン

「介護過程」の「カンファレンス」 conference on Sept. 19

伊勢崎興陽高校「福祉と人間を学ぶ系列」は、地域で活躍できる福祉・医療人材になるために学習を行っています。「現場で学べ」をモットーに、介護実習、病院などのインターンシップ、交流活動、ボランティアなどを積極的に行っています。福祉系列では、文部科学省と厚生労働省が指定する単位を修得することで介護福祉士国家試験受験資格を得ることができます。介護福祉コースの定員は30名です。(以上、伊勢崎興陽高校のホームページより)

専門の学習科目は、社会福祉基礎、介護福祉基礎、コミュニケーション技術、生活支援技術、介護過程、介護総合演習、介護実習、こころとからだの理解、があります。



今回は、9月19日(木)1～2時間目、3年生「介護過程」の授業におじゃましました。

生徒はいつものように班(3名)ごとに着席しています。基本の生活クラスはさまざまなコースの生徒で構成されているので、福祉の授業の時だけ、各クラスから集まって来ます。男生徒5名女生徒13名の理想的な人数で3年間学んできましたから、「チームワークも授業のレベルも高くなってきました」と中山見知子先生は嬉しそうで、余裕の笑顔。

今日は「カンファレンス」を2時間かけてやるということです。カンファレンスとは「会議・協議」、病院や介護の現場で使われることが多く、普通科の高校では耳にしません、ここの生徒たちにとっては普通に使い慣れた言葉のようです。先週、先生が出張だったので、自分たちで班ごとに話し合っ

てカンファレンスの介護計画表(シート)を作成しました。今日は、それに基づいて各班が「介護計画」を発表し、それに対して他の班がそれぞれ疑問や意見を出し合うということでした。

認知症第3回の課題は「排泄」

さて、そのお題は?という、認知症の第3回目「排泄」です。(DVD「めざせ介護の達人」「福祉ネットワーク」という番組のある事例)。夫婦と子ども(高校生)、妻の母親の4人家族で住んでいますが、母親のあさ子さん(70歳)が汚れ物を布団の下に隠し、夜中にトイレの場所がわからなくなりました。娘の佐和子さんが訊くと「拓也(孫)のいたずら」だと言い、佐和子さんが夜中オムツにしたらと提案すると、「馬鹿にしないでよ。冗談じゃないよ」と怒ります。なんだか、身につまされる話です。さあ、どうしたらいいのでしょうか?

あさ子さんの事例について、生徒は先週、①情報の記録、②情報の整理、③情報の分析・解釈をした上で、④課題、⑤課題を解決するための目標(長期、短期)、⑥具体的な計画をつくりました。中山見知子先生によれば、「課題」とは「あるべき姿(生活課題とニーズ)」のことで、長期目標は3か月後の姿、短期目標は1～2週間のスモールステップです。

あさ子さんの困りごとを分析する

いよいよ、カンファレンスが始まりました。A班から順に自分たちの分析・整理と計画を発表し、他の5班からそれぞれ質問・意見が出され、それに対しての応答です。

これが早くて、私たちはついていけない!生徒は集中して熱心なやりとりをしていることが信じられない!時には笑いさえ起こったりして、なんと素晴らしい授業なんでしょう。

中山先生は司会進行役といった感じですが、時には突っ込んだ質問を入れて討論を促し、深めたりしていました。

このカンファレンスの全てを再現することはとても無理なので、いくつかの場面を紹介することにします。

まず、各班がこの事例をどう分析・解釈したのか、まとめを紹介します。

A班＝認知症で見られる行動が増え症状が進んでいると考えられる。あさ子さんの性格を考えると、できることは自分でやりたいと思っているため、一人でトイレに行けるように廊下の足元に電気を取り付ける。

B班＝昼は一人で排泄ができていると考えられるが、夜は暗く迷子になってしまう。このままだと一日中オムツを利用することになる可能性があるので、トイレで排泄ができるような支援を考える。

C班＝日常生活(夜)に影響が出ているため、このままだと本人も家族も不安なため、夜間の支援が必要だと思います。

D班＝あさ子さんは「トイレはまだ一人でできる」と思っており、オムツになってしまうと認知症がさらに進行し、別の症状が出てしまうことが予想される。そのため、あさ子さん一人でトイレに行き、排泄をできるような支援を行うことが必要だと考えられる。

E班＝あさ子さんは夜間に一人で排泄をすることが困難になってきていると考えられる。なぜなら深夜のお手洗いで迷子になってしまい排泄が困難だと考えられるから。このまま失禁を繰り返すとあさ子さんの尊厳が傷ついてしまい、家族へも影響が出てしまう。そのためにはあさ子さんの自尊心を傷つけないような提案をする。

F班＝機能的尿失禁の症状が見られるが、本人は認めることができず、オムツを勧められたことに不安や怒りを抱えているため、本人の気持ちを緩和できるような支援が必要。

家族の理解が深まったか

A班は情報の分析の中で、まず「家族の認知症への理解が以前よりも深まったと考えられる」と指摘しました。先生が「うん、大事なことだね。どんな場面からそれがわかる？」と質問。

各班から「せめなくなった」「おとうさん(夫)が否定しなくなった」「せめない」「みんなで気にかける」「接し方が変わった」「怒らなくなった」と、さっと指摘。DVDをよく見てますねえ。

それでも、先生はつつこみます。具体的な計画で、D班の意見「佐和子さんが寝る前に廊下の電気を点けておき、夜中でもあさ子さんが一人でトイレに行けるようにする。…」に対して、「どうして佐和子さんなの？これでは佐和子さんを追いつめるよ。」

「できる人が」(と生徒)。「そう！そのために、家族の同意を得る」

ともすると介護の負担をしょういこむ嫁や実子への配慮と負担軽減を強調しました。

なぜ、あさ子さんは隠したのか？… あさ子さんの内面を思いやる

B班は「問題を解決するための短期目標」に「気持ちを整理したい」と書いていました。他班から「なぜ？」との質問。B班「一方的にではなく、あさ子さんの気持ちを聞いて」「わかってもらいたい」との答え。さらにもっと「具体的な計画」には「あさ子さんに今の気持ちを意図的に出していただけるようなコミュニケーションをとり、家族に受けとめていただき、今後の方向性について考える」。なるほど、プロの介護士の役割です。

そこで、先生は「あさ子さんはなぜ隠したのだろうね？」とみんなに問いかけました。うーん、私も一番気になる問題です。

E班が「…あさ子さんは不安と恐怖を感じているのでは、と考えられる。」「佐和子さんがあさ子さんに夜間でオムツをつけることを勧めたところ、『冗談じゃない』と怒り、強い怒りと悲しみを感じたのではないかと考える。」(中略)「そのためにはあさ子さんの自尊心を傷つけないような提案をする。」

あさ子さんの内面を深く思いやって分析しています。こういう意見交換を通して、介護士の真髓(ハート)が育つのでしょうか。

課題を解決するためには

さて、あさ子さんの課題と解決のために、何をどうすればいいのでしょうか。

生徒が考えた課題は、「夜間に一人でトイレに行きたい」「今まで通り一人で排泄したい」「排泄など自分でできることは自分でしたい」「家族で迷惑をかけずに自分ができることをしたい」「オムツを勧められないように一人で排泄がしたい」ということでした。

そのために、具体的な計画が各班からあげられました。「足元に電気をつける。トイレのドアに目印をつける」「廊下の電気をつけておく」「足元のライトやトイレに蛍光のシールをはる」「夜、あさ子さんの様子を確認、声をかける」「寝る前にトイレのドアを開けて電気を点けておく」「廊下の電気をつけておく」「電気のスイッチとトイレまでの道のりに（蛍光テープで）目印をつける」「夜中はトイレの電気をつけ、少し扉を開き、トイレがわかるようにしておく」など、あれこ

れ工夫しています。

これに対しては、生徒からの質問・意見も出やすかったようで、「シールは見えるの?」「トイレからの帰り、迷わない?」などと、活発な意見交換がありました。

それでも中山先生は満足しません。「具体的な計画には、5W1Hが必要ですね。明日のお昼休みまでに、具体的な計画を完成して提出して下さい」と宿題を出しました。

地域の希望

「施設は生活の場だから、一人ひとりのニーズに合わせて、みんな同じでなくていい。いろんな施設があって選べるといいですね」と、中山先生の言われたことで、母のお世話になったグループホームを思い出しました。

入所当初「ここはどこね?」「娘が二人もおるのに何でこげな所に入らなならんと?」と怒って家に帰ったがっていた母は、そのうち「家に帰る」と言わなくなり、毎日の「生活」の場として四季折々の行事を楽しんで

いたように思います。そして、施設の職員の方々に最後まで手厚く看取られて長寿を全うしました。

私の生まれた鹿児島県は「貧しい出稼ぎの県」。多くの団塊の世代がそうだったように、私も故郷を出て東京に進学・就職し、両親の「老後」の生活を一緒に過ごすことができず、悔いがありました。母のお気に入りの若い介護士さんは、奄美大島の出身でした。

今、伊勢崎興陽高校の生徒たちは、卒業後、それぞれ群馬の地で進学・就職し、地域の福祉と介護の頼もしい担い手として活躍します。それは、希望だと実感しました。

《文責：瀧口典子》

福祉演習（介護過程） DVDを見て得た情報を整理してみましょう（9月19日）

DVD		3 年 組 番 () A	
情報の記録	情報の整理	情報の分析・解釈	
あさ子さんが布団の中に汚れた物を隠している。知らない人を見つけたら、	健康状態 認知症	家族の認知症への理解が以前よりも深まったと思われる。	
夜間に家の中で迷子になる。	心身機能 身体機能 認知症	認知症の症状が進んでいると思われる。夜間に暗いので不安や恐怖心がある。	
佐和子さんには自分と同じ年代の友人がいて相談している。	活動 できる 掃除	身心からいい気持ちがある。	
佐和子さんがあさ子さんに夜間オムツを付けることを提案する。→バカにばいだよ。冗談じゃないよと否定する。	活動 している 立位・座位 歩行・食事 排泄（昼間）	夜間の排泄が難しくなってきたと思われる。	
	参加 子育て経験あり	廊下や暗いので存分にトイレの場所がわかりやすいと思われる。	
	環境因子 家族と4人暮らし 夜間が暗い	以上のことから認知症が進んでいると思われる。あさ子さんの性格を考えるとできることは自分でやりたいと思っているため、トイレに行けるように廊下の足元に電気を取り付けたい。	
	個人因子 はっきりしている 強気		

A 班の介護計画表（部分）

「楽しい学校」の最大の武器は授業

伊勢崎興陽高校 中山見知子（福祉と人間を学ぶ系列 系列長）



教科「福祉」の中で「介護過程」は総まとめの科目となる。すべての福祉科目の知識・技術・考え方を総合して実際の利用者さんの支援計画を立てる科目である。最終的には、それぞれの生徒が、それぞれに担当している利用者さんの計画を立てなければならない。もともと、福祉は正解が白黒つくようにはつきりしないことが多い教科である。その中でも「介護過程」は生徒の持ってきた計画が正解なのかどうか非常にわかりにくい科目である。

そのため、授業では正解を示すことではなく、考える視点や道筋を示し、生徒に考え抜くように指導している。自分なりの考えを持ち、友人と意見交換をし、妥当性の高い方向性を話し合う、その繰り返しである。

高校生になると、授業中の発言を控えることが多い。そうした態度では福祉の授業は成り立たない。そのため、福祉系列では系列選択時よりグループダイナミクスを意識して集団作りを行っている。指導者である教諭が授業は「楽しい」時間であると意識し、どんな発言であっても尊重する態度を示すことで、少しずつ発言が増えてくる。その一方で生徒には、福祉・医療の専門職を目指すのだから、私的にどんな関係であっても、公的な場である授業にはチームで協働して取り組むよう「お願い」している。

さらに、福祉系列では様々なイベントに参加する機会が多い。そこに来ていただくお客様に良い対応をするために、感情を自己覚知し統制できるような体験も積んでいく。こうした、地道な働きかけの積み重ねがあって初めて今回の授業のような「カンファレンス」が実施できる。生徒が「我が事」として問題を捉え、よりよい解決方法に向けて考え、話し合い、お互いに尊敬し切磋琢磨する。教師として本当に嬉しい、楽しい授業である。

学校教育の中で、一番大切なのは「授業」だと考えている。学校教育が学習する場であるから「授業」が大切なのはもちろんであるが、生徒指導をする上でも教師の授業力は必須のものであると考え、「面白い授業」を心がけている。

また、学校は生徒が一日の大半を過ごす場所である。その学校が「楽しい」場所であれば、生きている甲斐も無いとも考えている。学校を楽しい場所にする最大の武器が授業である。授業では生徒の知的好奇心を喚起し、自己肯定感のみならず自己有用感を高めることができる。そのため「面白い授業」を研究し実践していくことを心がけてきた。教育の楽しさを味わわせてくれる生徒さんたちに感謝の毎日である。



高崎健康福祉大学健康福祉学部の学生とともに伊勢崎高等特別支援学校との交流を見学しました。

伊勢崎高等特別支援学校との交流

7月16日

ー自然体で、楽しく、ノーマライゼーションを学ぶ

伊勢崎興陽高校で福祉を学ぶ生徒は、授業の他に、様々な活動に参加していますので忙しいそうです。そんな中、7月16日、伊勢崎高等特別支援学校との交流を見学させていただきました。

この交流は、高等特別支援学校の生徒たちがとても楽しみにしているそうです。生徒は2年と3年の33名。興陽高校の生徒は3年の福祉コース21名。

興陽高校の生徒が挨拶をした後、ゲーム交流に入りました。双方の生徒が混成で三つのグループを作り、それぞれ「ボーリング」と「ジェスチャー」を楽しみました。次の「台風ゲーム」は4人1組のグループで長い竹の棒を持ち、走ってポールを回り、リレーしていくのです。興陽高校の生徒が両端について特別支援学校の生徒を気遣いながら走ります。

最後は、興陽高校名物の「興陽レンジャー」の出動。ギャグあり、決闘場面ありで、おおいに盛り上がりました。

どの場面でも、興陽高校の生徒はかまえずに、自然体で特別支援学校の生徒と接していて、さすがと感心しました。



一緒に見学させてもらった高崎健康福祉大学学生のレポートの一部を紹介します。

健康福祉学部・高木瞳

ボーリングやジェスチャーゲームでは、興陽高校の生徒さんが特別支援学校の生徒さん一人ひとりの様子に合わせて接していたり、『すごい』『がんばって』などと声かけを行っていたり、ゲームの進行状況に応じてゲームの進め方や内容を臨機応変に対応している姿を見て、私自身も福祉を学んでいる身ですが、相手の様子に合わせて接していくのは簡単なことではないのですねと思いました。

健康福祉学部・福田祐星

交流授業を通して両校の生徒は、互いに接することによって、自然にノーマライゼーションの考え方を取り入れることができるのではないかと考えました。(中略)

伊勢崎興陽高校の生徒が考えるゲーム内容は、どれも様々な工夫がされていると感じました。ノーマライゼーションの考え方を意識し、障害の有無に関わらず、誰もが参加することができ、楽しむことができるようなゲームとなっていたため、両校の生徒は、皆、楽しそうにゲームを行っていました。このようなゲーム交流を行うことによって、伊勢崎興陽高校の生徒は、どのような工夫を凝らせば互いに楽しむことができるのかについて考えて、自然とノーマライゼーションの考え方に触れるため、その福祉観を高めることができるのではないかと考えました。

取材を終えて

高校3年の9月は生徒も先生も進路で大忙しの季節。連日、書類作成に追われている中山先生には快く取材を受け入れていただきありがとうございました。授業の後のインタビューに応じてくれた生徒の皆さんにも感謝します。正解のない問いをとことん考え抜く姿勢に取材陣はただただ圧倒されました。

《取材・撮影・文責：瀧口典子・倉林順一》



関東高校介護技術コンテスト最優秀賞の3人